

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
オオナリ、北陸193号	31.6ha	916kg/10a	382kg/10a (534kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 役員2名、従業員(パート含む)4名
- 規模拡大の予定はないが、地域に遊休農地を作らないように農地を引き受けている。
- 飼料用米の作付ほ場の一部は3年に1度、大豆とのブロックローテーションを行う。

【作付品目】

- 主食用米 ヒカリ新世紀、コシヒカリ等 7.4ha
- 飼料用米 オオナリ、北陸193号 31.6ha
- 大豆 里のほほえみ 17.6ha

【取組のきっかけ】

- 「オオナリ」を平成28年産から導入。それまで作付ていた「夢あおば」等と比べ、より多収が期待できることから主力品種とした。
- 令和2年からは多収品種で複数年契約を行っている。

【取組概要】

- 稲わらは全量をすき込むとともに、収穫後は豚ふん堆肥を800kg/10a施用して土づくりを行っている。
- 育苗箱1箱当たりの播種量を200g程度と密に播種して、育苗ハウスの使用面積を圧縮して管理作業を省力化している。
- 8条植えの田植機を使用し、植付けを45株/坪の疎植にすることで、育苗数を12~13枚/10aに抑えてコストと労力の低減に努めている。
- 田植えと同時に基肥一発肥料(飼料用米専用一発・早生用)を40kg/10a施用。出穂後7日頃を目安に窒素成分で1kg/10aを農業用ドローンで追肥している。また、病害虫の防除として育苗箱施薬と農業用ドローンによる殺虫殺菌剤の散布を行い、雑草防除は田植え後初中期一発のジャンボ剤を使用する等、作業の省力化に努めている。
- 収穫は適期収穫を心がけている。出荷はフレコンを使用し、随時、実需者に直接引き取ってもらうことで、保管場所を必要としない。
- 通常4~6インチロールが一般的である粃すり機を、8インチロールにすることで作業効率の向上を図っている。
- 主食用米の田植えは4月下旬に行い、飼料用米の田植えは5月の連休から開始して5月中に終わる等、作業時期の分散を図っている。
- 地域の養豚業者と連携し、養豚業者に飼料用米やもみ殻を提供するとともに、豚ふん堆肥を購入して土作りに活用している。
- 周辺地域の農業者や関係者等と日頃から情報・意見の交換や助言を行っている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
みなちから	1.4ha	881kg/10a	368kg/10a (513kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 常勤2名、臨時雇用1名
- ほ場集約・団地化に努める。地域では離農者も多く、求められれば規模拡大も視野に入れている。
- 米・麦・大豆の2年3作を行っている。今後は子実用とうもろこしをローテーションに加え、地域の畜産農家との需給体制の構築を検討している。

【作作品目】

- 主食用米
ほしじるし、彩のかがやき、彩のきずな 8.0ha
- 飼料用米 みなちから 1.4ha
- 米粉用米 7.0ha ○ 小麦・大麦 45.0ha
- 大豆 10ha ○ 子実用とうもろこし 16.0ha
- 業務用ブロッコリー(JGAP取得) 1.0ha

【取組のきっかけ】

- 米価の動向を踏まえた経営判断で、3年以上前から飼料用米の作付に取り組んでいる。当初栽培していた「オオナリ」は草勢が過剰で、脱粒性も見られた。そこで、短稈で難脱粒性であり立毛乾燥ができることから、育てやすくコンバインへの負荷が少ない「みなちから」を選んだ。

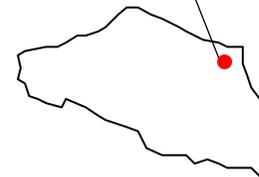
【取組概要】

- 稲刈り後は速やかにカルチベーターで田起こしをし、土を乾かすことを心がけている。
- プール育苗を行い、水管理の省力化を図っている。田植えは育苗箱を1反あたり15枚としている。
- 施肥については、は種時に育苗専用肥料「苗箱まかせ」による箱底施肥を行うことで肥料効率化を図っている。また、田植時に被膜プラスチックによる海洋汚染を軽減した肥料「Jコート」を側条施肥にて施用し、無駄のない施肥を心がけ費用を抑えている。
- 病害虫防除については、播種時に殺菌剤の注入、田植え時に殺虫殺菌剤を箱施用している。その後、病害虫防除は行わず、省力とコスト低減を図っている。
- 雑草防除については、田植え時に初期剤を散布、その後ラジコンボートで初中期フロアブル剤を散布している。防除は2回のみ。
- 収穫は立毛乾燥とし水分16%まで乾燥させたのち行っている。乾燥機で14.5%まで乾かしJAへフレコン出荷をしている。
- 水稻では早生の「彩のきずな」、中晩生「みなちから」、晩生「彩のかがやき」等、栽培することで、収穫時期の分散をしている。
- 全農の営農管理システムZ-GISを利用。ドローンの導入を検討している。



加須市

埼玉県



4 かやま ゆきのり 香山 行徳 (茨城県常総市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ほしじるし	6.0ha	799kg/10a	256kg/10a (543kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・父・母)
- 地域に担い手が少なく、規模拡大に積極的。効率的な作業が見込めるほ場を見極め集積する。また、規模拡大に伴うほ場管理の煩雑化に備え、営農支援システムKSASを導入した他、両親の高齢化を考慮し、アシスト機能付き田植え機を導入。

【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ 11.3ha
- 飼料用米 ほしじるし 6.0ha



【取組のきっかけ】

- 就農当初は飼料用米の栽培に苦慮していたが、移植時期や水管理の見直しにより改善した。
- 「ほしじるし」を選んだのは、①多収性があり、②イネ縞葉枯病抵抗性による減収回避と安定栽培が見込め、③主食用品種との作期分散ができるため。令和2年から複数年契約での栽培に取り組む。



【取組概要】

- 収穫後の稲わらは全量すき込む。腐熟促進のために硫酸を1袋/10a施用し、飼料用米栽培において多量にすき込むわらによるガスわき等の軽減を図る。
- 育苗資材は大ロットでまとめて購入し、一般的価格より安く入手している。近年の高気温を考慮し積極的に換気を実施する等、健苗の育成に努めている。
- 田植機を6条から8条のものに更新し効率化した。栽植密度は坪50株の疎植で行い、育苗箱数の削減にも取り組んでいる。また、秋～冬にかけてロータリーで4～5回程度耕転することで、春の耕転を省略し、ほ場に入水後1回の代かきでの田植えを可能としている。
- ①田植え前にブロードキャスターにより基肥一発肥料(BBファイト055)を10aあたり15kg全層施肥し、②田植え時には同肥料を10aあたり32kg側条施肥している。これらにより多肥が必要な飼料用米栽培において、多忙となる田植え時の肥料の補充回数を軽減し省力化を図っている。
- カメムシ・いもち病・紋枯病を対象とした市の空中散布(7月下旬)に合わせて、晩生品種の飼料用米→主食用米の順に移植することで、両方の出穂期が空中散布時期に重なるように工夫している。カメムシ被害の予防策として、畦畔周辺の草刈りを出穂の2週間前を目安に実施している。
- 圃場周辺の雑草は、田植え前→田植え後(6月)→8月上旬→10月下旬に除草剤または刈り取りによって対応している。圃場内の雑草は、田植えと同時にクラー1キロ粒剤を施用し、田植え10日後頃にコメットジャンボ(ほ場の四辺から投げ込み)を施用している。
- 燃料費削減を意識して、立毛乾燥を行い、ほ場内で水分を下げてから乾燥している。収穫・乾燥調製後、玄米にしてフレコンに詰め、JAIに出荷している。
- 普及センターでの現地検討会や農協の栽培講習会に参加し、肥料や農薬についてメーカー等と情報交換・収集を行い、実践している。

7 こくぼ えいいち 小久保 栄一 (埼玉県深谷市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	3.6ha	843kg/10a	373kg/10a (470kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・妻) ○ 減農薬・減化学肥料
- 積極的な規模拡大は行わないが、離農者等の農地を引き受けている。
- 農業機械もオークションなどを常にチェックし、安価で取得している。作業はできる限り自ら行い、機械化できるものは積極的に行っている。

【作付品目】

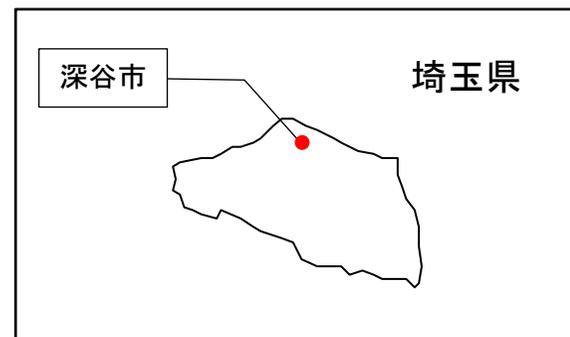
- 主食用米
コシヒカリ、彩のかがやき 2.0ha
- 飼料用米 北陸193号 3.6ha

【取組のきっかけ】

- 多収品種でどれだけ収量が上がるのか興味があったこと、所得計算が予測できたこと、飼料用米なら籾出荷でき省力・低コスト化が見込めたこと、販売先を見つけられたこと、また、地域農地保全のメンバーとして地域住民への稲作栽培継承の一例として示すことができる、等の理由から飼料用米を作付するようになった。
- 「夢あおば」では収量が伸びず、多収が見込める品種について調べ、3年前から「北陸193号」を作付。

【取組概要】

- 稲わらをすき込み、鶏ふんの完熟堆肥を施用している。鶏ふんは必要量をまかなうため、何回かに分けて引き取りを行う必要があり、都度施用している。
- 育苗箱を1反あたり12.7枚とし、運搬の労働力を軽減している。なお、育苗は自分でやっている。
- 以前は、育苗箱を運搬し、ほ場に降ろす作業をしていたが、現在は、作業効率を重視し、軽トラから直接田植機に移すなどの工夫をしている。株数は機械で設定できる一番少ない坪あたり33株としている。
- 畜産農家に主食用米を提供し、マニュアルスプレッダを無料で借りている。なお、化学肥料は環境への配慮およびコスト低減のため使用していない。
- 育苗箱の殺虫、殺菌は行うが、ほ場には殺虫・殺菌剤は一切使用しておらず、コスト低減に繋がっている。
- 当該品種は草丈が高く、雑草に日が当たらないため生えなくなる。ヒエ対策として、除草剤「エリジャン乳剤」を1反あたり、300ccほど施用する。
- 主食用米と作業時期がずれるよう、栽培品種を選定している。作業効率化及び籾すりの際の粉塵対策として、フレコンを用いてモミで出荷している。
- 地域の栽培暦作成に協力し、技術の周知を行っている。また、個人からの技術の相談があり、個人毎に適切なアドバイスを実施している。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ほしじるし、にじのきらめき	9.8ha	853kg/10a	310kg/10a (543kg/10a) [※]

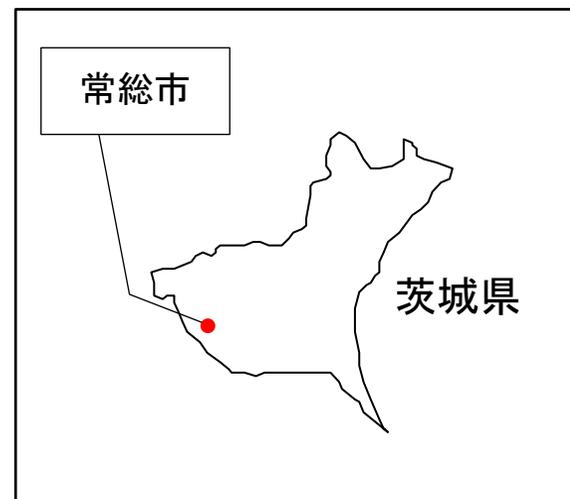
※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・妻・息子)
- 規模拡大には意欲的だが、地域には担い手が多いため、無理に規模拡大はせず、耕作放棄地がある場合は集積している。
- 特に水管理に注意を払っており、茎数制御や根の健全化を意識して栽培を行う。

【作付品目】

- 主食用米 コシヒカリ、ミルキークイーン 11.8ha
- 飼料用米 ほしじるし、にじのきらめき 9.8ha
- 小麦(さとのそら)、大麦(カシマゴール) 22.0ha
- 大豆 里のほほえみ 2.4ha



【取組のきっかけ】

- 「ほしじるし」と「にじのきらめき」を選んだのは、①多収性があり、②地域で問題となっているイネ縞葉枯病抵抗性を持っており、③主食用品種との作期分散ができるため。令和2年から複数年契約での栽培に取り組む。

【取組概要】

- 収穫後の稲わらは全量すき込んでおり、分解促進のため、秋から冬にかけてロータリーで4回程度耕耘している。また、県内業者に委託し、鶏糞堆肥を10aあたり550kg散布してもらっている。
- 3年ほど前からプール育苗を導入したことで、灌水不足による障害の発生を防いで均一に育苗できるようになり、省力化にも寄与している。
- 田植えは8条植えの田植機で行っている。日頃からメンテナンスをしっかりと行い、故障や修理のリスク低減に努めている。また、栽植密度は50株/坪で行い、使用苗箱数は13枚/10a程度としている。秋～冬に耕耘を行うので、春の耕耘を省略して1回の代かきで田植えを行っている。
- 基肥には、高成分の窒素を含有するBBファイト055を10aあたり40kg側条施肥し、窒素の利用率を高めて多収性を発揮しやすいようにしている。
- 病害虫防除として7月下旬に市で一斉に実施される空中散布を活用しており、いもち病・紋枯病・カメムシ防除を同時に行っている。また、雑草防除として、田植え後に、初中期一発剤としてポデーガードプロジャンボを散布し、残草がある場合には、生育中期にレブラスを散布している。
- 中生(コシヒカリ)→中晩生(にじのきらめき)→晩生(ほしじるし)の順番で、移植や刈取り作業を重複させずに続けて行い、作期分散を図っている。また、収穫については適期収穫を心がけ、作業場で乾燥・調整後、玄米にしてフレコンに入れ、農協に出荷している。
- 農協主導の新品種や栽培技術に関する講習会や、現地巡回等に参加することで、情報収集や意見交換を行い、栽培技術の向上を心がける。